
一年間な彼女～long ver～

坂本ヒロノリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一年間な彼女～long ver～

【NZコード】

N3640B

【作者名】

坂本ヒロノリ

【あらすじ】

十五歳になると『消えて』しまう国。そこに住む、一人の少年と、一人の少女の物語。

プロローグ　回想（前書き）

この作品は『一年間な彼女』という短編小説を長編にアレンジした作品です。事前に短編の方を読んでおくのを推奨します。

プロローグ 回想

「ハアハアハア」

月の夜を走る。

ただ、あても無く走る

両親は言った。

お前は最高の息子だ、と。

たがひ それを信じて生きてきた

「ハア、ハア……」

月の夜を走る

交差点を右に曲がる

両親は言つた。

お世には嘗ての思ひたと

八
八
八
八
八

橋の上から下を望む。

高い。

飛ひ下りたる きと夕め

死ぬ

「あ…」

殺される？

「あ……あ……！」

殺される？殺されるって誰に？

それはあの元

惜くなつて
思い出しがくなくて
咲かあても無く走り出しが

「...」

月の夜を走る。

橋を超えて山に入る

両親は言つた。

お前がいれば大丈夫だよ、と。
だから、そんな言葉にすら縋つた。

הנְּצָרָן

獣道で走るのを止めた。

それにもう、頭から拭い去れない。

両親は言った。

あの子に罪は無い、と。

だから、それは聞いてはいけない話だと、思った。

「：なんでだよ！」

知らず、叫んでいた。

その叫びは、誰に聞き入れられるでもなく、哀しく森に木霊して、消えた。

「ああああああああ！」

月の夜を疾る。

何も考えずに、視界が涙で歪んでいるのに、ただ疾る。

両親は言った。

このままでは生きていけない、と。

同時に、一人でならなんとか生きていける、とも。

理由は分からぬ。けれど、
捨てられるかもしない。

でも、不思議と怖くは無かつた。子供なら、捨てられても捨わ
れるかもしぬないから、なんて理由の無い考えを信じて、黙つて聞
いていた。

「う……ハ……ハア……う……」

月の夜を疾る。

走つて、派手に転んだ。

立ち上がろうとしても、身体に力が入らない。
もう、身体は限界だった。

その証拠に肺は不足分の酸素を欲しがつていて、喉も痛い。お
まけに足はよく見たら傷だらけだった。

「なんで、僕は逃げていたんだう。」

それは、誰に訊いたのか。

知っているのは、自分と両親しかいないというの。」

両親は言った。

あの子を放したくない、と。

ジャアドウスル？

ジャア、サンニンデシニマショウ。

逃げる理由はそれだけで十分だった。
身体が動かない理由も、きっと見えない恐怖に怯えて、身体が限
界を忘れていたのだろう。

「ハア……ハア」

呼吸が落ち着いてくる。

満身創痍な身体で、なんとか体勢を俯せから仰向けに変える。

夜の月を見上げる。

木々の間から、ずっと頭上に在った月が見える。
月は、欠ける事無く、青く輝いている。
ああ、今夜はこんなにも綺麗な満月だったのか。

「……なんで」

何故自分達は欠けてしまったのか、何故三人では生きていけない
のか。

満月に問う。

答えは、返つてこない。

喻え、返つて來ても、それはただの逃げでしかない。

だって、全てを知っているのは、自分と両親しかいないのだから。

…なんだか、急に眠くなってきた。

逆らわずに瞼を閉じると、遠くから、声が聞こえてきた。

…なんだか、遠い。

けど、特定の名前を呼んでいるわけではないそうだ。

両親の声でないことだけを確認すると、安心したのか、意識は深い所に落ちていった。

プロローグ　回想（後書き）

正直ジャンルを『恋愛』にしてしまったのですけど…まあ、大丈夫ですね。

1、始まりは夢の♪♪♪（前書き）

長く更新してませんでしたが、やっと更新です。
ロングバージョンとこいつとで連載になりますが、末永くよろしく
お願いします。

1、始まりは夢の「じぶく

「ん……」

窓から差し込む朝日が眩しい。

ウチの朝は起床から出立までそれはもつ詰まつていて、スケジュールの滞りは即遅刻に繋がる。繋がる、のだが。

「後五分ぐらいなら……」

誰に言い訳するでもなく、再び布団にくるまる。

実際は校門が閉まるまで五分ぐらいなら猶予があるし、走つていけば間に合つはずだ。

「へえ、じゃあ遅刻はしないんですね」

「ええ、しませんとも。なのであと五分眠らせてください」

クスクスと後ろで笑い声。ああもう、早速嫌な予感が。

「そうですねえ。確かにこの起床時間でしたら五分程有余があります。ありますけど、逆を返せばそれは五分しか時間がないと考えられませんか？」

「そういう考え方もあるでしょ」うね

クスクス。

笑い声は止まらない。

「ええ、五分です。五分で出来る事なんてたがが知れますよね。」

カップのうどんを作つたり、服を着替えたり、出来てその程度です

「ですね。でも俺なら朝飯は食べれます」

クスクス。

クスクス。

「ええ、分かつてます。ですから私の作った朝ご飯が冷める前にどうぞ召し上がってください」

それは最後通告のように聞こえなくもなかつたが、今は眠い。眠気に勝るものはない。

「美佐子さんには申し訳ありませんけど、朝ご飯はあと三分钟後に起

床してからいただきます。それではおやすみなさい

言い訳もそこそこに布団を被り直す。ああ暖かい、柔らかい、これ

「さうなさい、」とくちにいはせた

自分でも毎度のことだとは思うけど、

りてないかつてのはそりや自分。

てこずには、結局朝ご飯は冷えたまま台所に残るんです。あの子達が食べるから捨てるわけではないのですけど、それでも自分が作った人に食べてもらえないというのは少しばかり不快なわけですよ」「今度は笑い声の代わりになんかポキポキと関節を鳴らす音が聞こえてくる。

「それでも、お起きにならないんですね？」

はい 今日は運動して 中韓ご飯に食へて いき おつかれさまで

- ケホツ !

声と同時に布団の上から衝撃。つい一ことはこちらが言い終わる前に跳んでいたのだろうか、そうでないと時間が合わない。信用ないのか？…信用ないよな。そりや毎朝こんな感じだから信用しているほうがどうかしてこるつてもんだ。

し上げなくもありませんがどうしますか?」「

美佐子さんの声は笑っている。怖くて布団から出れないが、きっとその顔は笑顔なのに恐ろしいオーラを纏っているに違いない。

美佐子さんは怒ると丁寧語のはずなのに所々に暴言が混ざるとこ
妙な持色を持つてい !?

「恭平さん？ 人と話すときもしくは人からお説教をされるときは

ちんと正座をして相手の目を見ないと命の保障はできませんよ？」

細腕上等。美佐子さんは体のどこにそんな力があるのか、片腕で俺の胸倉を掴んで持ち上げている。足はもちろん床についていない。

「は、はい。気をつけ ます」

「本当ですか？明日からはきちんと私が起こしにきた時に起きてくれますか？ちゃんと朝ご飯が冷めない内に食べてくれますか？」

・美佐子さん。心配そうな表情はいいですけどこんな状況では脅迫しているとしか見えませんよ。

「善処 しま…す」

ああ、意識が朦朧としてきた。あれ？見たことのない人が手を振つて…

「よろしい。それでは早速着替えて下りてきてくださいね」

柔和な笑顔が場に不釣り合いな分余計怖い。

美佐子さんが手を離した。一瞬の浮遊感の後、尻餅をついて覚醒する。

「……」

まさしく「テッドオアアライブ」。朝からこんなヘビーなイベントは正直勘弁してほしい。自分のせいだけど。

「……着替えるか」

口に出して脳に指令を送る。

脳に酸素が回つてなくても、まず何よりも優先すべきことだけは分かる。

この状況で一度寝したら本当に殺されそうだし、うん。

制服に着替えて一階に降りる。頭はまだ半覚醒状態だが、永遠に前後不覚になるよりはマシだわい。

「恭兄いおはよー！」

「ああ、おはよー！」

廊下を駆ける子供達に適当な挨拶をする。

子供達、つてのはこの家が世間で言つ孤児院をやつていて、そこで拾つた子供達が朝から元気に走り回つていたという事。経営者は先程鮮烈な目覚めを提供してくれた倉地美佐子さんその人。柔軟な笑顔が素敵な三十歳なのだ。

ちなみに俺も元孤児である。元つてのは今はもう児童なんて歳じゃ無くなつただけで、立場的にはまだ孤児らしい。

ちなみに名字は倉地。何を隠そう美佐子さんの名字なのだ。ここに来る事になつた原因があまりにも大きかつたからなのか、前の名字に対して何にも感慨らしいものなんてない。それに、事件の後の人間不信だつたころ、つまりここに入るまでに親族の誘いや他の孤児院なんかの勧誘をことごとく断つてしまい、入れる場所がここ以外無くなつてしまつたのだ。なので生きるために前の家の事は切り捨てたのだろう。

「まずいな。急げ！」

足が止まつていて。急いでキッチンに入る。

「む、ねぼすけめ」

入るなり、新聞片手にコーヒーを飲んでいる女子中学生に馬鹿にされた。こいつは、倉地優子。くらぢゆうこ立場的には俺の妹で、中学一年。ちなみに俺より一つ下。特徴は老け込んでいる事。中学生に新聞は相容れない物のはずが、こいつには妙にマッチしているあたりから老け込んでいるのだと伺える。

「そう言つな。俺だつて好きで寝過ごしてゐわけじゃない
いただきます、と手を合わせる。

「嘘。じゃあなんで毎朝美佐子さんの怒声が部屋から聞こえてくるのよ」うん。美佐子さん今日は気合い入つて。卵焼きの焼き具合が既に人間の域を超えている。

「それはアレだ。可愛さ余つて憎さ百倍」

「じちそつさま。美佐子さん。お皿置いといでいいですか？」

いいですよー、と朝一番に聞いた声が台所から響いてくる。

「よつし、そんじやいつてきます！恭兄も遅刻したらダメだからね

！」

「僕子は軽やかなステップで台所を横断する。

「余計なお世話だ。それより早く行け。落ち着いてメシが食えない味噌汁を啜る。今日はいりこ出汁のようだ。ほのかな風味が味噌と絶妙にマッチしている。

「ふん。この朴念仁」

「知るか。年寄子」

いつも通りの罵り合い。

この光景が我が家の中の一部で、この後は大体美佐子さんが止めに入るものこの状態が続くのだが

「……」

「僕子の表情が険しくなった。今日はなんだかいつもと違つようだ。

「僕子？どうした。遅刻するぞ」

「……」僕子は険しい表情から呆れたような表情に変わり、俺を見下ろす。

う、その

「だから朴念仁なのよねー」

つていう由は止める。なんか傷つく。

「……はあ、心配したのは無駄だつたってわけか

「……？」

「僕子の言つている事はよくわからない。

「なんだよ。心配されるようなことした覚えはないぞ」

「……あのね。美佐子さんは気付かなかつたみたいだけど、恭兄顔色ヤバいよ」

「顔色？」

「別に今日は体調悪いわけじゃないけど……そんなに顔色悪いのか？」

確かにあんまりいい夢見たとは思わないけど、ああいうのはここ数年で見慣れたから平気になつた。

そんな俺に上から溜め息一つ。

「しかも自覚無しか……自分のことすらわからない恭平君は可愛い妹

にすら見放されたのでした」

「はいはい。言つて。つーかひとつと学校行け」

「ええ、言われなくても。恭兄は気分悪くなつたら早退するんだぞ」「傳子の姿がキッチンから消えると同時に食事を再開する。ちくしょつ。結局冷めちまつてゐるじゃん。

「んじや、いっしきます」

美佐子さんに見送られて家を出る。

「いっしりつしゃー。今日は早く帰つてきつてくださいね。大事な日ですから

はで、今日は子供達の誕生日だったか。美佐子さんや傳子のはとつくに終わつてゐし。

「美佐子さん。今日は誰かの誕生日でしたつけ？」

「…え？」 美佐子さんは目を見開いたまま止まつてゐる。ヤバ、地雷踏んだか？

「あの…俺なんか聞いちゃいけない」と聞いぢやいました？

「いえ、そういひ」とじや…けど恭平さん。本当に覚えていぢやらないんですか？」

「はい。本当に記憶の中にありますええええええ…」

ゆ、指が！ 美佐子さんの指が俺の頭を驚掴みに！ といこますか何故！？

「ふふふ。恭平さん。あんまり人をからかうと寿命を縮めるつて以前お教えしましたよね？」

「からかつてませんからかつてませんすいませんでしたすいませんでしたああああ…」

「…」

「あああ…あ？」

頭にかかる負荷が和らいでいく、なんだかよくわからないけど助かつたらしい。といつかこのままじや遅刻するのではないだろうか。

「俺…もう行つていいですか?」

「…そうですね。遅刻してはいけません」

美佐子さんは下を向いていたが、俺を見送るためか、顔を上げた。

その時の、美佐子さんの作った笑顔が頭に張り付いて離れなかつた。

1、始まりは夢の「JET」（後書き）

作中の恭平が言っていた夢つていうのはプロローグの内容の事です。読んでいない人はそちらを読めば納得頂けるかと。あとこちらよりもう一つの輪廻転生の方が更新頻度高いのでそちらも「JET」見ください。

2、変わらぬ日常（前書き）

時間がかり過ぎですね（汗）

2、変わらぬ日常

「ここ一年で慣れ親しんだ道を歩く。

学校は孤児院から歩いて一十程度の所にある。通学路は住宅街を通るルートなので、面白いものはこれと言って特に無い。

学校手前の十字路に着いた。ここから我が高校最大の難関、長い坂道を上らなければならない。

通称が『地獄坂』なんてふざけてるとは思うが、少なからず朝から疲れる思いをするのだからあながちその呼び方は間違つていなかのかもしれない。

多分名付けたのは野球部だろう。朝から練習量がハンパじゃないのに、この坂で体力なんぞ消費してやつてる余裕は皆無に違いない。坂も半ばに差し掛かる頃、横をバスが通り過ぎていった。

バスの中にはウチの学校の制服が溢れていた。性悪な連中は徒步通学の俺を見てせせら笑つているが、生憎こちらはそんな器の小さい奴等と関わり合つつもりは今の所ない。

「いつの頃からだつただろう。

人や、物に、本氣で接せなくなつたのは、

美佐子さんや優子は別だ。あの一人は俺がそつなる前から触れてきた唯一の人物だし、もし違つたとしても、俺はあの一人には隠せない部分が出て来たに違いない。

知り合い曰く、

「恭平はね、人との距離の置き方が下手なんだよ。下手だから物事に冷たく当たつて、自分との距離を保とうとしているんだ。そういうの自己犠牲つていうのかな。あんまり関心しないけど、それが恭平だしね」

とのことじこ。

冷めた人間、と誰かに言われたような気がする。

…まあ、今更訂正したところでそのキャラが払拭出来るとは思わないし、所詮あと一年程度の命だ。どう使おうと誰にも文句を言つ資格はないはず。それに

「怖いんだよ。実際」

今もまだ、朝の夢が心の奥底で黒く渦巻いている。
俺は我儘だ。

我儘で貪欲で臆病だから、自分が一番可愛いから、誰からも侵されないように、奪われないように、わざと冷たく当たる。

幼少時代の話なんて関係ない。自己犠牲なんて立派な物じゃない。あの時のように、信じていたものが壊れるのが、裏切られるのが、気が狂いそうな位怖い。

俺は、ただ現実から逃げている臆病者にすぎない

「はあ、朝から最悪だな
やはり夢見が悪いといけない。

どうも気持ちの悪い物は後に引く。なんだつけこいつの、フランク・シュバックとか言つたつけ。まあどうだつていいか。

坂は残り半分。早い所登り切つて、教室で睡眠不足分の睡眠を貪らせて貰おう。

「おはよーす」

無氣力にクラス連中に挨拶をして、自分の席に座る。そしてそのまま机に突つ伏した。

運動を止めたからか、体が内側から熱を放出して、凍えた指先が熱い程に熱を持っている。

机は異常なまでに冷たかったが、襲いかかる睡魔の前では微々たるもの。いつもと変わりなく、俺はあっさりと眠りに入った。

キーンゴーンカーンゴーン

朝のホームが終わった。

今日の欠席者は一人。

真面目に聞いていたのは俺ぐらいで、大抵はそれの話に夢中だった。

欠伸を噛み殺す。

「寝たりない。もう一眠りしよう。再び机に突っ伏す。と、

「恭平。どうしたんだい？やけに眠そうじやないか

聞き慣れた声がした。

「夢が気持ち悪くて眠りが浅かつたから眠い。だから眠らせてくれ」

「ふーん。その様子だと本当に眠そつだね。一体どんな夢だったの？」

目の前の旧友、華夕聖かゆまさ人は実に楽しげだ。甘いマスクに甘い声。低身長で童顔。天が一物も三物も与えた結果がこれだ。地獄に落ちる。

「子供の頃の夢だ。しかもどびきり最悪のヤツ

「それって…あの時の？」

「そう、それ」

起きずに返事だけする。

聖人と俺はお互に相当小さい時からの腐れ縁で、昔は家も近所だったから毎日遊んでいた。なので俺の過去の話も知っていたのだろう。

「あ…聞いたやいけなかつた？」

「いいや、どうせ朝の夢で鮮明に思い出されたんだ。別に今更どうないことない」

いつまで経つても眠れなさそつなので、仕方なく体を起こす事にした。ゆっくりと背伸びをし、視線を前に移す。すると田の前には聖人と、何故かもう一人女子が立っていた。

「あれ？ 灰堂さん」

「う、うん。お、おはよう。倉地君」

目の前の少女は何故かしどろもどろしている。

灰堂薫。俺の隣の席に座っている女子で、近所のよしみで話していたら、なんとなく仲良くなつた。

趣味はかわいい物収集、自分で作つたりもするらしい。

ある点を除けば、中学生女子の平均的な肉付き。体重及びスリーサイズは不明。そりや、身長が百七十センチもあれば隠したくもなるだろう。

こんな大柄な少女がかわいい物好きだつたり、意外と健気で一途な性格だつたりするから、世界は奥が深い。まあ、本人がかわいいから許せるんだけど。

「おはよう。実際はあんまり寝れてないけどね」

いつもの笑顔で答える。が、それはむしろ逆効果だつたらしく、

「あ…邪魔、だつたかな…だつたよね…」

灰堂の声に元気が無くなると同時に、大きな体がどんどん縮こまつっていく。

「…灰堂さん。君のせいじゃないんだから、そんなに卑屈にならなくていいって」

「ううん。倉地君が眠いのは私が朝から話しかけたからよ…」

「あの…？ 灰堂さん？」

「ええ、そうに違いない。ごめんね倉地君。私なんかが迷惑かけちゃつて…」

灰堂のテンションはみるみる下がつていいく。気が付けばクラス中の視線がこちらに集まっていた。

痛い。激しく痛い。周囲からの視線もだけど、なにより心が。

「そう…私はいらない…いらないんだ…」

灰堂の一人言はとどまる所を知らない。といつか視線の質が明確な殺意に変わつてきているのはどうしたのだろう。俺は悪くないぞ。

「灰堂さん」

と、無口を決め込んでいた聖人が突然口を開いた。

「ほら、恭平も言つてるじゃん。気にしなくていいって。それに、灰堂さんつて注目されるの苦手でしょ？ 今ものすごく視線集めてるよ」

「え…え…！」

「だから、ほら。皆に、私は大丈夫ですよーって微笑みかけてあげなよ」

「あ…うん…」

灰堂の大柄な体が百八十度方向転換。クラス連中の息を飲む音が聞こえる。

「み…みんな…」

灰堂は明らかに緊張している。これは失策ではないのだろうか。だが、それは杞憂だつたようだ。

「わた、私は…大丈夫です」

引きつっていた口角から力が抜けた。体の震えも治まり、心なしに余裕が出てきたように見える。

ふう、と一呼吸。

永い、けれど短い間を置き、

「私は、大丈夫です」

百点満点中百点の笑顔で、灰堂は笑ってくれた。

満面の笑み、とはこのことを言うのだろう。灰堂の笑みはクラスの男の心を動かし、女子の母性本能をこれでもかとくすぐつた。俺も聖人もそれに漏れる事は無く、一人して惚けたまま、その笑

顔に見入つていた。

「灰堂さんはね。もう少し堂々としていた方がいいと思うんだ」
時は既に昼休み。

自分は弁当派だと訴え続けた灰堂を無理矢理学食まで連れ込み、私はお弁当以外は食べません。という要求を承諾して、やつと食堂の安テーブルに落ち着けることが出来たのだ。ちなみに俺は基本弁当派時々学食。

「そうなの…かな」

四角いテーブルには灰堂と聖人が仲良く並んで座り、向かい合うように俺が一人で弁当をつづいている。食堂には丸テーブルもあるのに何故か聖人はこの四角いテーブルをチョイスした。これはきっと何かのあてつけなのだろう。

「そうだよ。身長が大きいからつて気にする事ないって。人間は個人差があつてこその人間なんだからさ」

「…華夕君つて…詩人みたい」

「ありがと。自分で気取つてるつもりはないんだけど、よく言われるんだ」

…なんだろう。この二人から感じられる恋人みたいな雰囲気は。「ところで、今度の休みの日に恭平とカラオケにでも行こうと思つてたんだけど、灰堂さんも来ないかな?」

「私…が」

「うん。やっぱり遊ぶなら人数多い方が楽しいだろうしね」

そして何やら今度男連中と遊びに行く予定だつたカラオケに無理矢理誘おうとしている。確かにまあ、男ばかりよりは女子もいたほうがいいとは思うけどさ。

「私…音痴、だよ?」

「気にしない気にしない。それだつたら目の前にいる恭平だつてうまくないから心配いらないよ」

さらりと人の秘密をバラした鬼は、隣りのか弱い少女を蹂躪し続

けるのでした。めでたしめでたし。

あまりにも俺の居場所がないので、水飲んでくる。と言つて立ち上がる。

それにして、いつから聖人と灰堂はあんなに仲がよくなつたのだろうか。灰堂なんて知らない人に話しかけられるとすぐ涙目になつて震え始めてしまう。その様子は、某社のチワワよりもよっぽどそそられる。クラス内影の人気ランキンギ一位たる所以はその辺りが要因だろう。

コップを手に取り、ボタンを押す。カラソと、氷が落ちてくる。水が注がれ、丁度いいぐらいで指を離す。後ろに待ち人がいるみたいだし、あまり長々とは注いでいられない。

水を飲みながら、自分のテーブルまで向かう。途中、待ち人の姿を横目で伺う。

「なんで麻婆豆腐があんなに辛いの…！訳分からない！」

ヒステリックに麻婆豆腐の存在意義を否定している女がいた。辛くなければ麻婆豆腐ではないだろうに、じいじにとつての麻婆豆腐とは何なのだろう。立ち止まつていると、そいつと目が合つた。

ヤバ、気まずい。

一瞬の沈黙。のち、

「麻婆豆腐は… まろやかに卵よね？」

そいつはえらく雰囲気に合つていらない事を、事もあろうに俺に聞いてきた。

「……は？」

「だから、麻婆豆腐は卵を混ぜてまろやかに、辛味を中和して甘味を前面に押し出さなきやいけないって言つてるの…」

何やら本気で怒つてるようだが、俺には理解不能。初対面の相手に麻婆豆腐の事を説かれて話を合わせる事は出来ても、納得できる

人間を俺は知らない。

と言うか、こんなやつ学校にいだらうか？リボンは縁、俺達と同学年らしい。どんぐりのような大きな目に、肩までの短い黒髪。顔全体のバランスはよく、とりあえずかわいい部類に入る。身長は灰堂マイナス15センチぐらいだろう。

が、辛い物が甘くないと納得出来ないような歪んだ味覚者に、これは現実というものを、教えて差し上げなければなるまい。

「マー・ボーは…辛いだろ。普通」

「なんですって！アンタ馬鹿にも程があるわよ！」

「馬鹿とはなんだ馬鹿とは。そもそもマー・ボーが甘い？それこそ馬鹿だろう。昔の人が苦心して作った料理を何だと

ドスンと腹に重い感触。原因は目の前の奴が正拳突きを繰り出してきたためと思われる。

「つて痛えな！いきなり何すんだよ！」

「ふん。知らない」

痛がる俺を尻目に、そいつはいかにも興味無さ氣に水を注ぎ、短い髪を翻して自分の席へ戻つていった。

「…なんだつたんだアイツ」

不平不満を愚痴りながら、コップ片手に食堂を横断、席に戻る。

「お疲れ。お腹大丈夫？」

「大丈夫だ。つーか見てたなら助けてくれたつていいんじゃないかな、と思って」

「いやいや、何だかすごく親しげだったから入り込むのはアレか

か？」

「親しげ？俺がアイツと？」

「何言つてんだ。俺あんな奴今日まで見た事なかつたぞ。アレは何組の奴だ？」

「……え？」

何故か聖人は目を見開いて硬直している。仕方がない。

「灰堂さん。さっきの奴の事知つてるかな？知つてるなら教えて

欲しいんだけど

「あ…うん」

灰堂は弁当を食べる箸を止め、話し始めた。

「あの人は… 1組の古谷冬美ちゃん。… 部活には入ってなくて、勉強が出来て、私の幼馴染み」

「幼馴染みって事は… 灰堂さんの友達?」

「ううん… 家が近いから昔はよく遊んだらしけど… 今はあんまり…」

「そうか… ありがとう」

適当な所で会話を切り、食事を再開する。灰堂も無言で食べ始めた。

古谷冬美… 覚えていろ。

昼食後の授業は睡眠で消化し、帰りのホームも上の空で過ぎた。時間はあっという間に過ぎ、空の色は徐々に朱を帯びてきた。

「…帰るかな」

そういえば朝、美佐子さんが早く帰つて来いと言つていた気がする。結局、誰の祝い事なのか聞いていなかつたが、まあ勝負は時間場所場合。臨機応変な対応が出来れば問題は無い。

NGワードは

「誰の誕生日だっけ?」

、それだけ確認しておけば十分だ。

しかし、行きも帰りも住宅街の中は見る物が無い。ある物と言つたら、どれも変わり映えしない家々や街路樹ばかり。

ここよりもう少し離れた所にある商店街は孤児院に入つてから色々とお世話になつてるので会話の種には困らず、処分品のコロッケやお菓子を格安で売つてもらえるので貧乏学生としては大いに助

かるのだ。

「…あ、そういうえば」

確かに、キッチンのお茶受けが切れていたはず。今の時間ならまだお零れに預かることが出来る。迷う必要なんてない。

進行方向を変えて、足が向かうは商店街。今日のお茶受けは煎餅がいいだろ？

馴染みのおばちゃんに挨拶をして、店を後にした。

両手にはパンパンに膨らんだビニール袋。中身は歩く度にガラガラと音を立てている。

「重い……」

塵も積もれば山となる、まさしくその通りだ。いくら煎餅とは言え、密集もすれば重くもなる。

そもそも原因は、店のおばちゃんの機嫌がいやに良くて、これだけの余り物をタダでくれたという所にある。

「店傾いたら俺のせいかな…」

多少洒落にならない気がするが、個人の責任なので深追いはしないでおこう。

孤児院の門が見えてきた。そこには一つの人影も立っていた。

「お帰りなさい。恭平さん」

美佐子さんだ。やんわりとした笑顔でいつも心に潤いを与えてくれる天使のような存在。

「ただいま。今日は疲れましたよ。ほら、こんなに煎餅もらっちゃつて」

「あらあら」

一人で笑う。何か忘れてはいけない事を忘れているような気がするが、結局忘れてしまっているのなら同じ事だ。

「で、誰の誕生日なのか思い出しました？」

現実は厳しかった。

「あ…ええと」

「覚えてないんですね？」

「はい、ホントすいません。一度とないよつてありますから今回だけは見逃してください。もしお望みであれば土下座でもしますからアイアンクローダーだけは勘弁してください」

「恭平さん。どうしたんですか？」

「…美佐子さんは怒り狂っている様子もなく、至って普通だ。

「…怒らないんですか？」

恐る恐る聞いてみる。

「ええ、普通だつたら怒つています。けれど、あなたでしたらしそうがありませんものね」

……俺だつたらつて…どうこう

「あ」

やつだ。今日は三月一日。

今日は、俺の誕生日じゃないか。

3、恭平の立場（前書き）

現在自分なりのビックイベントに参加中で更新投げやりですが、生
きてます。

3、恭平の立場

いつもなら自分の部屋に直行するはずだった俺は、今日に限ってキッチンへ足を運んだ。煎餅を置きにきたのもあるが、一番の要因は門の所で美佐子さんが、

「キッチンで子供達が待っていますから」

と、遠回しであるにも関わらず、行かないと殺されてしまうような錯覚を覚えるぐらいの無言のプレッシャーをかけてきたからであり、そんなもんかけられたら誰だって行くだろう。

いや別に悪い気分がするとか言つ訳じやないんだけビ。

キッチンは既にお祭り騒ぎだった。

窓枠は折り紙で作られたカラフルな鎖が彩り、ウチのキッチンにはカウンターがあつて、そのカウンターの上の壁には広用紙に色画用紙で『恭平兄ちゃんお誕生日おめでとう』と、少し泣けてくる作品を飾つていた。

それらを作つた子供達はと黙つて、主役そつちのけで会話に没頭していたりする。中には走り回つている子供もいるし、テーブルの上の美佐子さんが腕によりをかけて作ったと思われる豪華料理を盗み食いしているけしからん中学生もいたりする。無礼講上等。ただ最後のは多少許し堅い。

「コラ。そここの不良中学生。メインの人間差し置いて料理を頂くとはどういうア見だ」

傳子の体がビクツと震える。しばし硬直のち、

「遅いご帰宅だつたわねお・兄・様」

思いつ切り引きつった笑顔でひどく気持ち悪い事を言つてきた。

そりやそうか、俺の後ろには鬼子母神がいるわけだし。

「傳子さん……」

「ハハ、ハハハ……」

哀れ儚子。今日のパーティーはいつもより勢いに欠けそうだ。せめて骨ぐらいは拾つてやるよ。

「そんなにお腹が空かれてたんですね…」

ちょっと待て。

美佐子さん。いくら抜けていようと、それはあんまりなのでないでしょうか？

「は、はい。そうなんですよ…今日6限目が体育でお腹空いちゃつて！アハ、アハハハハ！」

儚子はここぞとばかりに事実捏造に拍車をかける。しかし依然顔は引きつたままだ。

「それじゃあ最後の仕上げに取り掛かりますから、もう少し待っておいてくださいね」

美佐子さんはかけてあつたピンクのエプロンを身に纏い、キッチンの奥へ姿を消した。

こうやって見ていく限り、美佐子さんは幼妻ぐらいの年齢にしか見えない。どんなに上に見積もつても「十代中盤」。昔、身の程知らずだった頃に一度だけ歳を尋ねてみたのだが、美佐子さんは笑顔で当時の俺を不眠症まで落し入れる程の考え方く限りの罵詈雑言を機械的に告げられた。

その一件以来、女性に歳を尋ねるのは死に等しい行為だと本能的に理解した俺は美佐子さん個人の情報を追及するのを止めたのだ。唯一の情報は、年に一度だけやって来る誕生日で、美佐子さんが今年三十一歳を迎えたといつ事ぐらい。全く、世界は謎だらけだ。

「…なんか失礼な事考えてない？」

「いいや、別に」

「…なんか誕生日にちなんだ事考えてたっぽい。そうだな、美佐子さんの事と私は睨んだ」

溜め息をつきながら、椅子に腰掛けた。こいつの直感力に対して半分感嘆、半分呆れが含まれている。横からは儚子の解答を待つて

いる真摯な視線を感じるが、いつもの事なので気にしない。

「無視ですかお兄様」

「氣持ち悪いから止める。誰がお兄様だ

「アート・アンド・クラシック」

「 」

אנו בראים

涙を流して優子は元気川にたましなく体を預けていた。たま

「傳子さん」

あ、
美佐子さん。
ごはんできただんですか？ それとも何か手伝い
」

「テーブルに顎を置くのはあんまり感心できる」とはありますん

ね
ー
ー

ものす」「ぐやかーに巻ししおだかしい」じゃのを忘れてはいけない。

「『』めんなさい。すいませんでした。今後から気をつけ、いや、今後一切金輪際このような暴挙に出ませんのぞ』とか見逃してしまった

誠心誠意：なのかな？

どちらかと言つて、人としてのプライドとか尊厳をかなぐり捨てて、手を貸さないでござる。

「ハナツボヌリ」二
二三

から、それを運ぶのを手伝ってください

—イエッサー！マイマスター！

「私は、しがない保育士です」

「：はい」

僕子の小粋なボケを一蹴。美佐子さんは僕子の手を引いて再びキツチンの奥に姿を消した。その光景はさながら間違つて降りてきた地球の住人に連行されている地球外来生物のようでもあつた。

「恭平兄ちゃんお誕生日おめでとう……」

台所に集まつた子供達はざつと十人。我が家総勢で、俺の誕生日会が始まった。

まあ、子供達は俺個人の誕生日を楽しむわけではなく、誕生日といつ非日常を楽しんでいるのであり、最初の言葉を言つたきり、冷たいものだ。

小皿に適当な料理を盛り、中庭に出る。夜の冷たい風が頬を掠めていき、浮ついた思考が冷めてゆく。そして、なんとなくだが自分が置かれている状況について考えてみたりする。

さう。倉地恭平の未来は、あと

「ああ、ここにいたんですか」

声に振り向く。そこには、Hプロンを外した美佐子さんが、後ろ手に何かを持つて立つていた。

「お誕生日おめでとうございます。恭平さん」

美佐子さんは、隠していた両手に赤ワインとグラスを一つ持つていた。どうやら晩酌をするつもりらしい。美佐子さんはゆっくりとこちらに来ると、俺の隣りに座つた。

「どうも。なんかいつもすいません」

「いえいえ。私が趣味でやつていいやつなことなので、気にしないで下さい」

「美佐子さんかそう言つな」

少しの沈黙。

きつと美佐子さんもさつきの俺と同じ事を考えているのだつ。まあ、でも、変えようのないことだつてあるのだから仕方ない。

「それで、やっぱり僕子さんはもう少し優しくしてあげたほうが

いこと思つたんです

「はあ……」

美佐子さんは「いやつてきてから止める」となくワインをあおつている。既に赤ワインの容器はカラ。一本目の白ワインをも飲み干さん勢いだ。

当然だが、そんなペースで酒を飲んでいる人間は、

「聞いてますか恭平さん？」

「え？ あ、はい」

「本当にですか？ 本当に聞いてましたか？」

「ええ、だから俺がもう少し儂子に優しく」

「恭平さん。人の話は人の顔を見ながら聞かないと意味がないのですよ？」

酔つてしまふわけで。

美佐子さんは中庭にある通称漬物石、正式名称漬物石にアイアンクローラーを食らわせて説教を開始しているが、そのままで負けるのはあなたですよ美佐子さん。

「……強くなりましたね。恭平さん」

「美佐子さん。それ俺じゃないです。それは石です。漬物石」

「これなら……私も安心です」

「……美佐子さん？」

もしかしてこの人、最初から酔つてなどいなかつたのではないだろ？ 切り出しにくい話題だからこそ、こう展開にして、俺の心の負担を少しでも減らしてくれようと……

「これで……化けきのこを倒しにいきますね」

……貴女はどんな夢を見ているのですか？ 美佐子さん。

「村から出るときはちゃんと銅のつるぎを装備して、出来る限りの防具を買っておきなさい。そして薬草も忘れずに」

「美佐子さん。俺はどこかの魔王も倒しに行きませんし、この辺りにそんなものは売つていません。売つているのはどこの土産屋ぐらいなもので……」

「せつ」

「つて美佐子さんー？」

謎の悲鳴と共に美佐子さんは石に寄りかかるよつてして倒れこんだ。

あわてて駆けつけると、石に寄りかかったまま、美佐子さんは小さく寝息を立てていた。

「ちょっと、こんなところで寝てたら風邪ひきますよー。」

「ううん……だから言つたでしょ、魔王には雷がよく効くって、まだその夢ですか。つーか魔王までついてくるんですか貴女は。それにしても、美佐子さんをこのままにしておくわけにはいくま

い。

「……わて、どうしたものか」

美佐子さんは完全無防備、今なら欲望の赴くままに行動する」とが可能だろう、が、可能だからこそ美佐子さんを知りつるものならばその欲望のままに動くことが出来ないのだ。だつて、後の怖さがハンパじゃないし。下手すれば殺されるかもしね。なので、

「よつ……と」

当然といえば当然だが、背負つていくことにした。

臆病者と後ろ指を指すなれ。育ての親にそんな失礼な真似ができようか。

「意外と重いな……つて、こんな聞かれたら即死モンだな」

自分でも変だな、と思つ悪態をつきながら、とりあえず一階の端にある美佐子さんの部屋まで頑張ることにした。

美佐子さんの部屋は質素だ。必要最低限必要な物しか置かれておらず、「ハハ」つ見当たらぬ。美佐子さんをベッドに降ろして、軽く揺すつて起こす。

「ほり、美佐子さん。起きてください」

「うーん……あれ？魔王の攻撃に碎け散つた恭平さんが何故ここに

？」

「砕け散つてませんから。まったく、だらしないですよ。大の大人が酔うまで飲むなんて、なんかあつたんですか？」

「それは……」

美佐子さんは下を向いて黙ってしまった。

既に誕生日会はお開きになつているみたいだし、片付けは儂子が一人でできるだろう。俺もワインが効いてきたのか眠くなつてきた。さつさと部屋に戻つて眠るしよう。

「それじゃあ俺は部屋に戻りますけど、なんにもありませんね？」

「……ええ、それではおやすみなさい」

……なんでもないなら。そんな今にも泣きそうな顔じやなくて、もう少し大丈夫そうな顔をしてくださいよ

「おやすみなさい」

返事をして、ドアを閉めようとしたとき、

「恭平さん」

やはりと言つべきか、美佐子さんは俺を呼び止めるのであつた。

「なんでしょう？ 片付けなら儂子がやつているだらうし、トイレなら入口までなら大丈夫ですよ」

「違います」

どうやら、ギヤグで切り抜けられる空氣ではないらしい。美佐子さんが今言つた言葉は、保護者としての考え方だ。当事者である俺の意思など関係無しに、ただ客観的に物事を告げるに過ぎない。そんなのは聞く必要はないし、なにより聞きたくない。

「恭平さん。あなたは自分のことをもう少し考へないといけないと思ひます。だつて、あなたはあと一年後には」

「美佐子さん。俺は一年後のことなんて知りません。今現在であつても実感なんて皆無だし、もしかすると本当はそんなのはないのかもしれないと考えていられないわけでもありません。それに、これは俺個人の問題です。あまり人に近寄られて、苦しい思いはしたくない」

一気に捲し立てて、逃げるよつにして部屋を飛び出した。

くそつ。なんだつて俺は美佐子さんに八つ当たりなんかしてるんだ……！

行く宛てもなく、夜の町を走る。

ああ、いつだつたか、霞むほど遠い記憶の中、こんな風に夜の町を走ったことがあった。

記憶は覚えていなくとも、足は覚えているのか、宛てはなくとも迷いはなかつた。

夜の町は静かで、世界には自分一人取り残されたよつ。

ああ、それは違うか。

この国、特に自分の状況から言つと、俺は世界に一人取り残されたのではなく、一人世界に外されたのかもしれない。

「……ハ、まだだ。まだ、早い」

あの時の場所を通り過ぎ、更に先を田指す。昔倒れた場所は遠くの眼下に。足は山の上を田指した。

「……ここは」

山の頂上。何故足がここに向いたのかはわからない。知り得ない光景ではなく、誰もいない場所だから選ばれたのだろう。しかし、ここまで走り詰めだったのでどこか休める所に行きたい。確かここ

には展望台があつたはず。曖昧な記憶を頼りに奥へ向かうと、小さな寂れた小屋と一台のベンチが隣り合つて置かれていた。倒れるようにして、腰をかけると、随分小さくなつた町が見える。

この町にも、今日、消えた人がいるのだろう。

馬鹿げている。そう誰も言わないのは、それが抗いよのない事実だと知つているからだ。

この国では、時折人が消える。

しかしそれは、突発的な事故ではなく、計画的な犯行。そう思えてならない。

だつて、十五歳になつたら消えるなんて、あまりにも出来過ぎているだらう?

泣き叫ぼうと喚こうと、相手は知つた事ではない。ただ目的となつた人物を消すだけ。

美佐子さんが言いたかつたことは、死ぬまで好きにしなさいということ。だが、俺はそんなことをする気は一切ない。

過去に最大の地獄を見たせいか、大抵のことに深い関心を持たずにつれてきたのがこんな所で役に立つなんて、なんて皮肉。

苦しい思いをしていなければ、苦しみが増すなんて、どう考えても損にしか働かない。そんな逃げ道には、誰も逃げないというのに

「……帰るか」

東の空が明るんできたころ、やつとそつ思つて立つた。

山の間からは太陽が上辺だけを晒し、それだけでも十分に光は照らし出されている。

昨日誕生日を迎えた俺には、もう一年も残されていなかつた。

4、新たな一日。（前書き）

更新停滞ー。眠いんだよー。

4、新たな一日。

世界はよくできている。人が死のうがロケットが落下しそうが、はたまたどこかで大量殺人が起きようと、地球は回り時間は過ぎる。そうやって日々は動き、絶えず変化する。

まあ、なにが言いたいかと云つと、俺程度がいくら足搔こうが世界は痛くも痒くもないつてこと。

悟りたくなかったが、悟るしかなかった事実。

でも、そんな当然知つていて、目を背けて生きていた。

それを再認させられて、俺は

とりあえず、学校に行くことにした。家の中にいたまま腐っていたところで事態は一向に好転しないだろうし、いや外に出たところで好転するはずもないんだけど、動かすにはいられない感じなのだ。とりあえず誰にも見つからぬように家に帰り、忍び足で廊下を駆ける。途中何度か見つかりそうになりながらも、なんとか逃げ切り、自分の部屋でバッグを引っ掻んでいざ脱出開始！

「……って何をやつてるんだ俺は」

そうだ。よく考えれば俺は悪い事をしたわけではないし、別にわざわざ隠れる必要もないじゃないか。

「よし。んじゃまあ」

まずは、腹ごしらえにでも行きますか。手に持っていたバッグをベッドに放り投げ、意気揚々と朝食が待つキッチンへと降りて行った。

キッチンからザンギュウジュウと何かが焼ける音がしている。多種多様なメニューに心踊らせながら、キッチンに入る。

「おはようございまー」

朝の挨拶は途中までしか喉を通らなかつた。その理由は……

「恭平……さん？」

俺の顔を見て呆然としている美佐子さんがあつた。美佐子さんはいつも通りの朝食の支度をしていたようだが、手に持つていたフライパンの上には何やら朝食には相応しくない塊が焼けている。

「あの……美佐子さん」

ジュウジュウ。余熱効果でフライパンの上の塊は未だに焼かれ続けている。

「はい。なんでしょう？」

「一つ訊いてもいいですか？」

「はい」

ジュウジュウ。ジュウジュウ。

「その……なんで朝からステーキなんですか？」

「食べたかったからです」

即答。有無を言わせぬ速度で、美佐子さんは言い切つた。

いや、言い切られても困るのでけど美佐子さん。

「……わかりました。ステーキの件は不問にしますので、どうか俺に朝食を作つてください」

「はい。それじゃあ急いで作りますね」

パタパタとスリッパを鳴らして、キッチンに消えた美佐子さんを見送り、イスに腰掛けた。

キッチンからは美佐子さんの鼻歌が聞こえてくる。ローレライと美佐子さんもなかなかマニアックですのう。

彼女は一体何に魂を移したのだろう。使えるのは私の体しかないから、と言つていたところを見ると、士郎はオンナノコになつたのだろうか。と、残された貴重な時間を無駄に過ごしていると、美佐

子さんがウエイトレスながらに、肩上まで朝食が乗つていいトレイを掲げて戻ってきた。

「お待たせしましたお客様。今朝のメニューはお味噌汁と、ぬか漬け、最後にステーキと田白押しなライソナップで1JRCIます」

「……えらく節操ないメニューですね。なにかあつたんですか？」

「ええ、せつかく今日、私が毎日楽しみにしているステーキティーだつたのに、恭平さんがいつもより一時間も早く起きてやがるので、熱々ステーキを食べ損ねて思いつ切り不機嫌なわけです」

「……そして冷めたステーキは俺行きというわけですか？」

「ええ、冷めたステーキほど悲しくて美味しくない物はありません。恭平さんが責任を持つて片付けるべきです」

そのわりにはえらく楽しそうに料理作つてたよなあ、とは口にしない。別に朝から肉を食べることに不満があるわけでもないし、他人の好物を奪つたような申し訳ない気分になりながら、まずは肉の解体に取り掛かることにした。

朝食を平らげた後も、俺はキッチンに止どまりて、美佐子さんと話込んでいた。一晩起きていたためか、眠気は全く感じない。

「それにしても、いつもより早く起きてくるなんて、寝起きが最高に悪い恭平さんらしくないですな」

「あ……実を言うと、昨日出て行つてから、一睡もしてないんです。なんとなく考え方してたらこいつの間にか朝になつてて」

俺の話を聞いた美佐子さんは、呆れたように溜め息をついた。

「はあ、徹夜するのは若気の至りだとは思いますが、ほんとほんじないと次の日がきついですよ」

「わかつてはいるんですけど……」

わかつてはいるんだけど、せざるを得なかつたというか、そもそもそんな考え、頭になかつたというか……

美佐子さんは厳しい目線で俺を見ている。そして、

「やはり……将来のことですか？」

俺の中でもまだ整理のついていないことを、口にした。

「将来、ですか。美佐子さん、その話は」

「ダメです。恭平さんは自分の嫌な事はすぐはぐらかしてしまうので、ちゃんと聞いてください。じゃないと今日は学校に行かせません」

有無を言わせぬ迫力と言葉、そしてそれを実行に移せるだけの実力を持つた美佐子さんに歯向かつのはこたえか無謀だ。

「はあ、それ本気ですよね」

「ええ、とっても」

不敵に微笑む美佐子さん。どうやら、この調子じゃ学校に行くのは昼過ぎになりそうだ。

「げ、なんか起きてる」

でも、とりあえず。キッチンに入ってきた不躾な妹と決着をつけてからにじょづ。

4、新たな一日。（後書き）

最近は寝不足で小説を書く余力がなくなり、更新停滞してすいません。
ん。

そんな状況でも、読んでくれた方には感謝です。

あ、最近公開した短編もオススメなので、是非読んでくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3640b/>

一年間な彼女～long ver～

2010年10月28日04時51分発行